

なぜ、大学入学共通テストに記述式問題が 出題されるのか？

【1】はじめに

校長便りでもお知らせしましたように、今の1年生から大学入試の制度が大きく変わります。「何が変わるのか」については、1学期の保護者懇談などでも資料をお渡しし、担任から説明させていただいていると思います。今回の通信では、「なぜ変わるのか？」を中心に、保護者の皆様にお伝えしたいと思います。

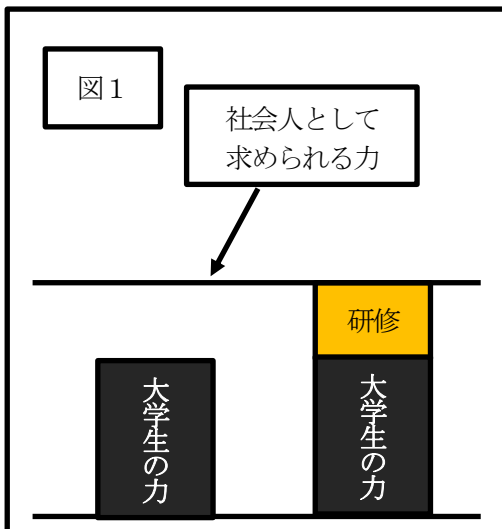
これからお伝えする内容は、主に私が色々なセミナーや研究会に参加して得た知見や、研究論文や著書で得たもの、そして文部科学省からの情報発信を元に、私なりに噛み砕いて消化できたものをお伝えするつもりです。ですから、「私」というバイアスが掛かっていることはご容赦ください。私が、主に勉強させていただいている研究者は、溝上慎一教授（桐蔭学園トランジションセンター 所長、元京都大学教授）、松下佳代教授（京都大学）、中原淳教授（立教大学）、森朋子教授（関西大学）の方々です。

【2】なぜ変わるのか？-その1 成熟社会（低成長社会）に対応した「生きる力」を養う

それでは、なぜこのような改革が行われるのかを説明していきたいと思います。まずは、文科省はどのような理由を述べているかです。平成28年3月31日に発表された高大接続システム改革会議の最終報告書の概要には、以下のように書かれています。

新たな時代に向けて国内外に大きな社会変動が起こっている中、多様な人々と協力しながら主体性を持って人生を切り開いていく力が重要であり、知識の量だけでなく、混んとした状況の中に問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造していくための資質・能力が一層重要になる。このような中で、今後の時代を生きる上で必要となる資質・能力の育成に向けた教育改革を進めるに当たり、特に重視していくべきは、（1）十分な知識・技能、（2）それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、（3）これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（これらを「学力の3要素」と呼ぶ）。

ところが、高校や大学の現状を見てみると、新たな資質や能力を養うようになっていないのではないかということを次のように言っています。

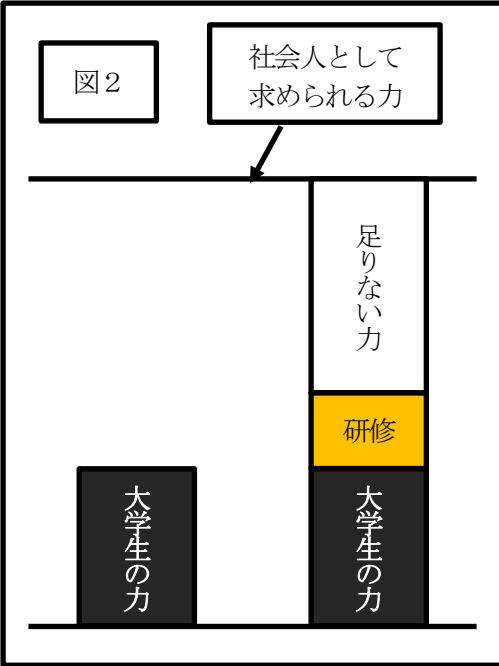


- ・高等学校教育：授業改善への取組も見られるが、「学力の3要素」を踏まえた指導が十分浸透していない。
- ・大学入学者選抜：知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適用の評価に偏りがち。一部のAO・推薦入試はいわゆる「学力不問」と揶揄される状況。
- ・大学教育：授業改善への取組も見られるが、知識の伝達にとどまる授業も見られ、学生の力をどれだけ伸ばし社会に送り出せているのかについて社会から厳しい評価。

だから、「高校の改革も大学の改革も大学入試の改革も一挙に行うのだ」というのが、文科省の理由です。さて、文科省が言う「新たな時代に向けて国内外に大きな社会変動が起こっている」とは何を指すのでしょうか？先に紹介した中原教授は、左の図1を使って説明しています。これは、高度経済成長時

のモデルです。

高度経済成長の時代は、大量生産・大量消費を基本とした産業構造なので、企業の成功モデルがはっきりしていたのです。つまり、業務内容についても新たな想像力を働かして、新しい成功モデルを生み出すことに力点を置くよりも（これは、一部のトップエリートがやればよいことと思われていた）、既存の業務内容をより効率的に、より正確に処理する能力の方が求められていました。だから、「処理能力の高い学生を採用しよう、そういう学生は、有名大学にいるはず。なぜなら高校までの学習で処理能力が高いから。」と思い、一流企業は有名大学の学生を採用し、学歴社会というものが形成されたのです。この処理能力的確さを養うために、小学校からどのような教育が行われてきたかということ、「漢字テスト」「計算ドリル」など決められた時間により多くのそしてより正確に処理できる能力を養ってきたのです。少し立ち止まってゆっくり考えたり、興味を膨らませて別のことを考える児童や生徒は、余り評価されなかった時代ではないでしょうか。企業も、大学生に研修を通じて会社の業務内容を学ばせることで、より正確に、よりの確にマスターすることを求めていたのです。



ところが、現在はどのような時代でしょうか？1990年代前半にバブルが崩壊し、絶対つぶれないといわれたエリートの象徴のような銀行まで倒産し、一部上場企業も合併・買収・吸収を繰り返す時代です。さらに、グローバル化が進み、日本の企業の競争相手は、日本の企業ではなく、世界の企業です。例えば、あのシャープが台湾の企業に買収されたのはショッキングな事件でした。中国・韓国などの企業がどんどん成長し、世界にどんどん進出しています。日本の企業は、高度経済成長の時代の成功モデルから脱却できず、「いい商品を作れば、世界では必ず売れる」という技術立国日本に依拠した成功モデルにこだわったために、どんどん日本の製品が世界では通じなくなってしまったのです。これは、携帯電話の推移をみれば、明らかでしょう。アップルがスマートフォンを販売してから、日本の携帯電話は「ガラケー」になってしまったのですから。いまでは、技術立国ということが恥ずかしいほど「データ改ざん」事件が発生しています。それはもう、過去の成功モデルが通用しなくなり、世界での競争に打ち勝つことができなくなったために、「最後の禁じ手」に手を出してしまったように思うのですが、それは言い過ぎでしょうか？

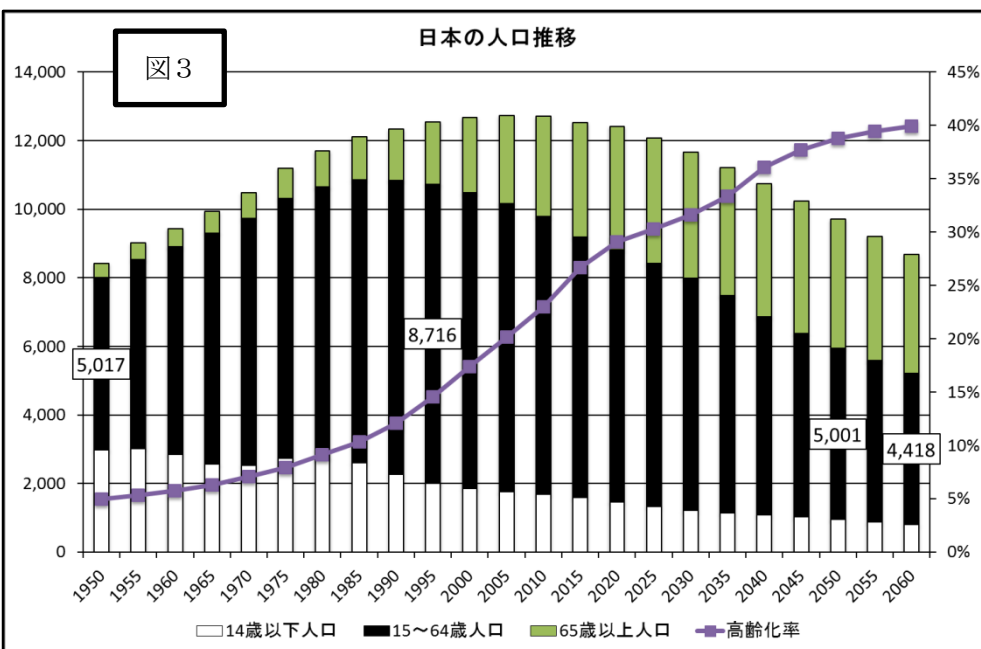
以上のような日本を取り巻く国内外の状況から、今大学生に求められている水準は、図2のようにとても高いものとなっているのです。この社会や世界に通用するために大学生に求められている力と現状の大学生の力のギャップが、どうしてもなく離れてしまっているの

で、先に示したように、

- ・大学教育：授業改善への取組も見られるが、知識の伝達にとどまる授業も見られ、学生の力をどれだけ伸ばし社会に送り出せているのかについて社会から厳しい評価。

と厳しい目で見られています。この大学生の力を伸ばすことを大学だけに求めるのではなく、高校段階から伸ばす必要がある、そのために入試も改革しようというのが、今回の改革の出発点です。

【3】なぜ変わるのか？—その2 世界が未体験の人口減少社会の到来！



左のグラフは、総務省が公表しているデータを元に日本の人口の推移を示したグラフです。1950年から5年ごとのデータが示されています。

保護者の皆様もご存知のように、日本は人口減少時代に突入しています。と言っても、それがどのような時代かは、誰も分かっていないのですが、グラフを読み解きながら見ていきたいと思います。

まず、自分自身を例にとってみると、私は1960年生まれの今年、58歳になります。ちょうど日本の人口がどんどん増加していく時期に当たります。また、日本の高度経済成長の時代を幼少

の頃から20代半ばあたりまで過ごしました。ちょうど、10歳のときに大阪で万博が開催され、「21世紀ってすごいなあ・・・」と子供心に夢見た年代です。あの頃、夢見た21世紀と今の21世紀を比べると、その当時の万博のテーマであった「人類の進歩と調和」がどこまで達成できたのかと思いますし、逆行しているのではないかとも思います。

保護者の皆様はどんな年代を過ごしてこられたのでしょうか？大体、今の1年生の保護者の皆様の平均年齢は、45歳前後です。私の13歳年下になりますから、1973年前後生まれの方が多いと思います。1991年にバブルの崩壊が始まっています。ちょうど、保護者の皆様が18歳前後です。ということは、小中高という時代は、日本の安定期からバブル時代ですので、かなりリッチな感覚の時代を10代に過ごされたのでしょうか。ところが、大学から社会人になる頃は、後に「失われた20年」と言われる低成長の時代を過ごされていることとなります。倒産やリストラの嵐が吹き荒れた時代で、非正規雇用・派遣社員の問題なども大きく取り上げられました。

さて、今の高校1年生は、2002～3年生まれになります。「日本の失われた20年」の真只中に生まれています。今の1年生が今後どんな時代を生きていくのか表で見てみましょう。

人生の節目	年代	総人口	生産年齢人口	65歳人口	高齢化率
社会人なる頃	2025年ごろ	1億2066万人	7085万人	3657万人	30%
結婚し家庭をもつ	2030年ごろ	1億1662万人	6773万人	3685万人	32%
	2035年ごろ	1億1212万人	6343万人	3741万人	33%
社会の中心的役割	2045年ごろ	1億0221万人	5353万人	3856万人	38%
子どもが結婚する	2055年ごろ	9193万人	4706万人	3626万人	39%

「今の高校1年生は、人口減少社会を生きていく」と一言と言っても、その内実は、15歳～64歳の生産年齢人口が、どんどん減少し、高齢化率が、どんどん増えていく時代です。ビックリするのは、

高校1年生の子どもが結婚する2050年頃の日本の生産人口年齢は、

1950年という戦後すぐの時代の5017万人よりも少ない

ということです。この戦後すぐの混乱期よりも生産人口が少ない時代とは、どんな時代なのでしょう。誰も想像できません。「限界集落」とか「コンパクトシティ」とか「東京一極集中の解消」などと、今は言われていますが、実際のところ何が起って、どんな社会になるのかは、ぜんぜんわからないのです。最初に紹介した溝上教授は、2030年～2040年の人口減少時代を予測し、その対策を考える仕事に関わっておられると聞きました。そんな教授でも口から出てくることは、

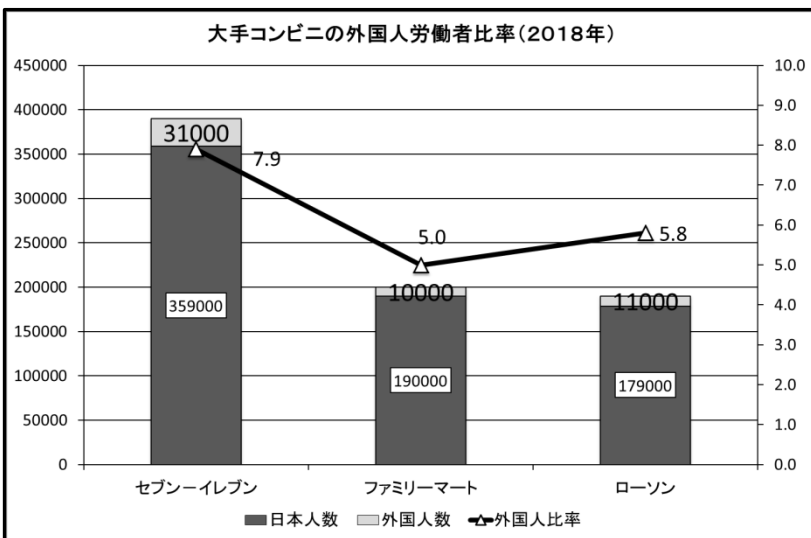
「それが、どんな時代か、誰もわからない」

ということなのです。

例えば、生産人口の減少を例にとって考えましょう。2020年の生産年齢人口が7341万人、2055年が4706万人ですから、今の高1が50代になるまでに日本の生産人口が、約2600万人減ることになります。現在の約35%減ることになるのです。100人の会社の従業員が65人になる計算です。会社としては、規模を縮小しなければ到底やっていけないでしょう。この問題をどう解決するか？解決の方向は、二つしかありません。

一つは、先ほど述べたように、会社の規模を縮小するという方向です。これを突きつけていけば、日本の経済活動のパイが小さくなっていくという事で、私たちのライフサイクルも大きく変わってくるでしょう。近くにあったスーパーやコンビニやガソリンスタンドは無くなり、遠くにまで出かけなければならなくなるでしょう。大手の店舗だけが生き残り、中小の店舗はどんどんつぶれていくかもしれません。

もう一つは、もうすでに現在も進行していますが、移民を受け入れるという事です。コンビニに行けば、アジア系の名前の名札を付けたスタッフに頻繁に出会います。グラフからも分かるように、セブンイレブンで働く外国人は、約31000人、7.9%です。すでに十分な戦力となっています。このような状況があらゆる業種、あらゆる職種で発生するでしょう、そして発生しなければ、日本の産業は立ち行かなくなると思うのです。

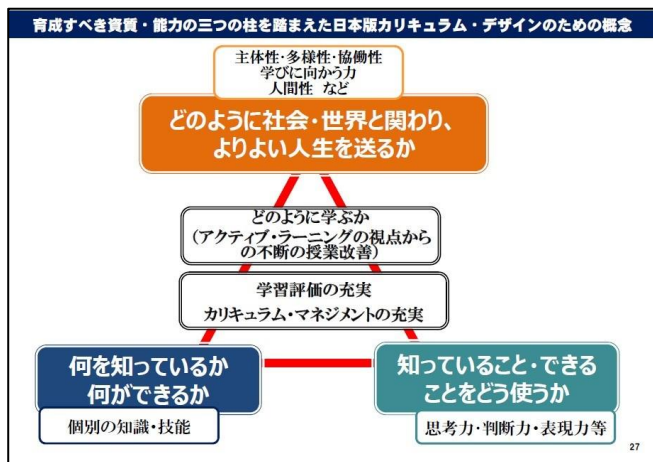


【4】子どもたちに求められる力

このような生産人口減少社会を生きていく今の子どもたちに求められる力は何でしょう？

私は、高度経済成長期を経験し、保護者の皆様はバブルから低成長時代を経験されてきました。子どもたちは、生産人口減少社会と超高齢化社会を生きていかなければならないのです。とすれば、当然のごとく、私の時代の成功モデルも、保護者の皆様の時代の成功モデルも全然役に立ちません。子どもたちに求められるのは、

- ・生起するさまざまな問題に対処する問題解決能力
- ・新たな成功モデルを生み出す想像力
- ・(国際的にも) さまざまな人たちとチームを組んで仕事ができるチーム力
- ・そして、チームで働くためのコミュニケーション能力
- ・困難にぶちあたっても少々のことではつぶれない忍耐力と復活力
- ・新たな課題に直面しても逃げない勇気・・・



等など、考えていけばきりが無いほど、新たな資質・能力が求められてきます。これを文科省は、「学力の3要素」として次のような図式でまとめたのです。これを解説すると、

今までは、知識・技能の習得を中心に学校で勉強を行ってきたが、身につけた知識や技能を使って、何をするのか？その前にどう使うのか？ということを中心に資質・能力を磨いていかなければならない！

ということを文科省は言っているのです。そのために、まさに最初の一步として、思考力を問うために大学入学共通テストに記述式問題を導入したのです。だから、この流れは、もう元に戻らないと思っています。元に戻ってしまうと、世界の潮流から

おいてけぼりを食らってしまいますし、それ以上に生産人口減少社会を担ってくれる人材が育たないでしょう。そうすれば、もう日本は、「斜陽の国」となってしまうと思います。昔、ある政治家が日本の将来像を「小さくともキラリと光る国」と表現しましたが、望むと望まざるとに関わらず、日本は小さい国になっていきます。あとは、『キラリと光る国』になれるかどうかです。そのための教育政策の高校一入試一大学の大転換を行うというのが、今回の高大接続改革なのです。

以上、言葉足らずながら、「なぜ、大学入学共通テストに記述式問題が出題されるのか？」という問いにお答えしました。これを読んで、「なるほど、そうか！」と思っていただければありがたいのですが、その次に頭によぎるのが、「だとすれば、保護者である私達は、今、何をすれば良いの？」ということです。それを今から列挙します。

1. OO高校の生徒は、思考力云々と言う前に、圧倒的に知識・基礎教養が足りません。まずは、しっかりと学校の勉強をさせてください。保護者説明会で報告があったように、勉強時間は減少しているのです。これは決定的にダメです。
2. 勉強時間を確保することを前提に、家庭で行ってほしいことは、社会の話題を語ってほしいということです。最初は、ニュースを一緒に見るだけでもいいです。そして分からないことは解説してあげてください。最近、池上彰氏のニュース解説的な番組がよく放映されているので、一緒に視るのもいいと思います。そして、お勧め番組は、NHKの夜10時から放映されている「クローズアップ現代プラス」です。この番組は「クローズアップ現代」から数えるとかかなりの長寿番組で、私が小学生の子どもと一緒に視ていた時は、7時30分から放映されていました。
3. そして、新聞を読ませてください。ニュースの解説を視ていると新聞の内容が徐々に理解できてきます。そして、新書を読ませてください。新書は、多くの研究者が論文形式ではなく、読者に興味関心を持ってもらおうと執筆した本です。ここまでくれば、あとは子どもが自分で自分の興味関心を開拓していくと思います。
4. 以上の事を行おうとすると、自己管理能力が問われます。自分を律する力です。その力が試されるのは、「スマホとの付き合い方」です。この点において、お子様の資質・能力が真っ先に現れてくると思います。自分ひとりでスマホを相手に「会話している」よりも、人を相手に会話したり、本を読んだり、社会に関心を持つ若者になってほしいと思います。

以上、10月20日の保護者説明会で私が話をするなら、このような話をするという内容を校長通信でまとめてみました。

この通信は、1年生の保護者の皆様だけに配布しています。